



福音讃美歌ジャーナル

福音讃美歌協会

新しい歌を
主に歌え

■巻頭言■「必要を満たされる神」

教会音讃美歌協会監事 山村雅彦

『教会福音讃美歌』が出版されまして、1年がたちました。皆様の教会においても、この讃美歌が使われていることと思います。

列王記・第二の4章には預言者エリシャの奇蹟が多く出ています。ひとりの女性が「家には何もありません。ただ、油のつぼ一つしかありません」といった時、エリシャは「隣の人みなから、器を借りてきなさい…それも、一つ二つではいけません」とのべ、「すべての器に油をつぎなさい」と命じました。主は集められた器すべてに油を満たしてくださったのです。「もう器はありません」と言うと、油は止まりました。

また、人々に煮物を食べさせるために野生のうりを煮たとき、毒が入っていて食べることができなかったのです。しかし、エリシャが麦粉をかまに入れると、悪い物はなくなって食べられるようになりました。

さらに、ある人が「初穂のパンである大麦のパン20個と、1袋の新穀」を運んできたとき、そこにいた召使たちは「これだけで、どうして100人もの人々に分けられましょう」と言ったのです。しかし、エリシャは「この人たちに与えて食べさせなさい、主はこう仰せられる。『彼らは食べて残すだろう』」とのべて、事実その通りになったのです。

イエス様は5つのパンと2匹の魚を5000人の人々に食べさせました。食べた人々は満腹し、残ったパン切れを集めると12のかごにいっぱいありました。また4000人の人々に7つのパンを裂いて配られたときも、食べた人々が満腹した後に、残ったパン切れで7つのかごがいっぱいになりました。

今日、私たちは、このような奇蹟を直接目にみることはできないのです。聖書の御言葉を通して私たちに表されているのです。主にある恵みの視点から、主が必要とされた時、御言葉を通して私たちの必要が満たされるのです。私たちがいくら願望したとしても、それが主のみこころでなければそなえられないのです。

主は私たちに賛美を授けてくださいました。賛美は私たちに潤いとやすらぎを与えてくれます。日常の忙しい生活の中に賛美を取り入れることで、ゆとりが出てくるのではないのでしょうか。

主のみこころによって『教会福音讃美歌』が日常生活の中でも用いられ、主イエスを心から喜びながら、賛美の歌が歌いつづけられることを願っています。

テゼの歌について

北海道聖書学院 2年 小野 寛

♪テゼ共同体について

創始者はスイス出身のブラザー・ロジェで、1940年にフランスの中南部にある村テゼに住み始めた。一日三回の祈りの生活を通して、まず、ユダヤ人を中心とする政治難民を迎え入れ、現在では世界各地から集まった約百人のブラザーたちがいる。テゼはやがて青年の訪問者たちを迎え入れるようになり、年間を通じて若者が世界中から訪れる巡礼地として知られるようになった。テゼでは、まず何よりも深い黙想のうちに育まれる心の祈りが優先される。滞在期間中は、聖書の学びとそれに続く小さなグループでの分かち合いのプログラムに参加し、ワーク・グループに所属して役割を担う。テゼでの生活はとても質素なもので宿泊施設は相部屋で、食事は屋外で配給のように配られる。

私自身がテゼを訪れたとき、自分自身の育ってきた教会の背景や慣れ親しんできた礼拝や賛美はあまり意味を持たなかった。自分は日本からただ一人の信仰者としてテゼの祈りと賛美の中に身を置くだけであった。しかし静まる生活の中で自分の内で本当に大切なものは何かと考えたとき、残るのはキリストの十字架だった。私にとっての祈りが言葉中心のものから、キリストを迎え入れ、神に耳を傾けるものに変わっていった。

♪テゼの歌について

テゼの歌は世界各国の人々が歌えるように多くの言語に翻訳されている。多くの曲が日本語にも訳されている。特徴は一曲が短く、そして何度も繰り返して歌われることである。一曲には普通5～10分ほどかける。伴奏はオルガン、ギター、場合によってはフルートやチェロなども入ることがあるが、基本的にはシンプルである。短調の曲も多い。歌詞の内容は簡単な告白や願い、応答が多くみられる。歌詞が自分のものとして歌いやすいものになっている。繰り返して歌う中で聖書の言葉を味わい、思い巡らすことで神との交わりを過ごす観想へと導かれていく。

♪テゼの歌を用いる有効性について

テゼの歌の音楽性は時代に逆行しているようにも捉えられる。それでも多くの若者がテゼを訪れ、世界各地の教会でテゼの歌が歌われるようになってきているのはなぜだろうか。

まず、単純で直接的な歌詞を短い音楽にのせて歌われているので歌いやすいばかりでなく、内容を理解しやすく、自分の中の神への渴望と聖書の真実性に気づかされて行く。また、何度も繰り返すことにより、呼吸のように自然にその歌詞が自分の告白へと導かれる。それは決して強制や義務感などではなく自然な自分の心の応答の賛美になる。信仰の背景の異なる者同士でも、単純な歌詞のゆえにその信仰告白の歌を分かち合うことも十分可能である。

次にテゼの歌は、この現代社会において人々のニーズに応えるものであると考えられる。複雑かつ情報の溢れる社会の中で多くのストレスを感じながら生きる人々にとって、テゼの歌は人々の心を静めて単純素朴にし、信仰の中で大切なものは何であるかを思い出させてくれる。この時代の中にある教会もその影響を被っていると考えられる。活動だけではなくそれぞれキリスト者の内なる求めを深く顧みていく必要があるのではないだろうか。自分の信仰のバックグラウンドや経験は高く掲げられるほど、教会ごとの、そしてひとりひとりの信仰の壁は高くされていくように思う。それらを横に置いて、神の前のひとりのキリスト者としてどのような存在であるかが問われ、私たちは神の前に静かに思いを巡らす必要があるように思う。

♪今後、礼拝の中でどのように用いられていくことができるか

テゼの歌が用いられていく方法は大きく二つの形が考えられる。一つは今までの礼拝の中に組み込む方法であり、もう一つはテゼの歌を主体とした祈りの集会を持つ方法である。礼拝の中では歌を用いる場合は、10回前後繰り返し歌いたい。この場合にただ繰り返すだけではなく、必ずリードする人を設けて繰り返して歌う全体の流れを祈りへとつなげたい。今日の教会の中では、それぞれが祈る場として夕べなどにテゼの歌を用いた祈りの時間を持つこともできるのではないと思う。平日、もしくは日曜日の夕方に礼拝という形はとらなくても、静かに神の前に時間を過ごしたい人が来ることができる集会を持つことが可能ではないだろうか。自由に参加できる祈りの集いのスタイルは、あらためて教会が地域や社会に門戸を開くきっかけになりうるのではないだろうか。また、教会内でもキリスト者の信仰生活の助けや霊性の充実にも十分につながると考えられる。

『教会福音讃美歌』編集作業の道のり

連載第2回

福音讃美歌協会 副理事長 讃美歌委員 中山信児

1. 編集方針

どのようなプロジェクトであっても、方針を立てずに作業を進めることはできません。しかし、それが初めて取り組む課題であり、従事する者に必要な知識も経験も欠けているときには、最初から詳細な方針を確立することは事実上、不可能です。

讃美歌委員の中には、讃美歌学や教会音楽を学んだ者、神学を学んだ者、教会音楽奉仕者として経験のある者、牧会に従事している者もいましたが、本格的な讃美歌集の編集について経験や知識のある者はいませんでした。讃美歌委員会の初期の段階において、各自が持っている知識に基づきながら、時間をかけて「編集方針」について議論しましたが、その中で気づかされたことは自分たちの知識と経験の不足でした。

そんな中、2006年7月の讃美歌委員会で、次のような緩い方向性を「編集方針（骨子）」としてまとめました。議論した者たちの覚書のような意味合いで書きとめたものですので、細部を詳細に規定することは敢えてしませんでした。また、今から見ると少々意味の分かりにくい所もありますが、この方針は最後まで大きな変更を要することなく有効に機能したと言って良いでしょう。

「編集方針（骨子）」（2006/7/4）

A. 作品について

歌詞について：美しく分かりやすい日本語 会衆の理解

文語・口語にこだわらない。

詞と曲との結びつき：歌いやすく、覚えやすい曲

B. 神学について

福音的な内容の讃美歌集。

包括的言語について福音派の立場で考慮している。

C. 編集主体・コンテキストについて

インデックスの充実

恒久的な取り組みの第一歩。（例：講習会、CD、伴奏版）

D. 用途について

礼拝で会衆讃美に用いる讃美歌集。

E. その他

初出（詞あるいは曲）を多く含む讃美歌集。

以降、この編集方針を念頭に置きつつ様々な讃美歌集を手に取り、多くの讃美歌に触れ、実際に歌いながら目と耳を養うことが、各自が当面取り組むべき課題となりました。そして、2008年9月の理事会で讃美歌集出版のスケジュールを検討し、2011年11月に500-600曲規模の歌集を出版することが決議されました。（実際の発行は予定より半年以上遅れて2012年の夏になりました。）

2009年に出版された『あたらしい歌』と「福音讃美歌ジャーナル 特別号」に掲載された目次案も、まだ試行錯誤の段階ではありましたが、この編集方針に沿って作られています。そして『あたらしい歌』が諸教会からおおむね好意的に受けとめられたことを通して、この編集方針の有効性が確かめられました。

しかしながら、編集は時間との闘いであり、実際の作業に取りかかるためには各自のスキルアップも大きな課題でした。当初は福音讃美歌協会の財政的基盤もまだ弱く、讃美歌集や資料音源の購入も各自のポケットマネーに拠るほかありませんでした。そのため基本的な資料が讃美歌委員に行き渡らないという事態も生じましたが、これには『あたらしい歌』の編集印税を用いて、すべての讃美歌委員が基本資料を入手するようにしたことで一応の手当てができました。また、専任の委員がおらず、それぞれが教会内外での様々な働きや責任を担う身でしたので、時間的にも大きな制約がありました。制約ということから言うと、本人や家族の健康や様々な事情でこの奉仕に専念できなくなることも何件か起こりました。くりかえしになりますが、そのような多くの制約や困難にもかかわらず『教会福音讃美歌』の編集を終えることができたのは、ひとえに驚くべき神の恵みと言うほかありません。

2. 誰に届ける讃美歌集か

「編集方針」の中で4番目に挙げられている「礼拝で会衆讃美に用いる讃美歌集」という一文は、編集方針の根幹となる項目と言って良いでしょう。『教会福音讃美歌』は、日本の福音的な「教会」の「礼拝」において「会衆」讃美のために用いられることを目的として編集されました。

しかし、個々の「教会」の神学的・歴史的背景、そして「礼拝」観やスタイルには、各々に独自の部分があり、それが多様性にもなっています。また、礼拝に集う「会衆」も、年齢、性別、信仰歴、社会的立場、いずれも様々な人々が集まっています。会衆ひとりひとりの讃美についての理解、経験、嗜好にも多様性があります。私たちが新しい讃美歌集を届けようとしている日本の福音的な諸教会という枠の中だけでも、実に重層的で豊かな多様性がありました。

編集作業は、みことばに立ち、福音主義を堅持しつつ、現場である教会の多様性を念頭に置いて進められました。新しい讃美歌学の成果や新しい作品も絶えず参照されましたし、作業に当たる編集者の背景や指向性もこの讃美歌集の大切な要素になりましたが、何よりも優先されたのは諸教会の必要に応えるということでした。

翻って、編集に当たる讃美歌委員の背景をシェアしたところ、皆かなり似通った背景を持っていることが分かりました。福音讃美歌協会の設立当初、正会員は神学的に違いの少ない日本同盟基督教団と日本福音キリスト教会連合で、讃美歌委員もこの2者から選ばれていました。年によって委員の異同はありますが、40台前後の男性が多く、所属する教会の礼拝スタイルに

も大きな違いはありませんでした。そのため基本的に一致する部分が多く、厳しい議論を重ねながらも安定して課題に取り組むことができました。反面、多様性に欠けていたため、様々な立場や流れについて文献を通して学ぶことが多くなってしまう、その弱みが、外の声を意識して受けとめていく必要につながりました。（続く）



本の紹介『メソヂストの音楽』

ー福音派讃美歌の源流と私たちの讃美ー

山本 美紀 著 ヨネベル 新書判／945 円（税込）

本書には二つの論考が収録されています。書名にもなっている「メソヂストの音楽」と附論「興業としての宣教」です。

メソヂストの讃美歌といえば、まずチャールズ・ウェスレーが思い浮かびますが、本書ではチャールズ以上に兄のジョンについて多くの頁が割かれています。すぐれた伝道者であり、メソヂスト運動の創始者であったジョン・ウェスレーは、同時に優れた讃美歌編集者であり讃美歌作家でもありました。

「メソヂストの音楽」の1-3章では、産業革命期の英国に生じた大きな社会的変動に直面しながら、ジョンたちがどのようにメソヂスト運動を展開していったのか、その中で讃美がどのようにして人々の心を捉え、用いられたのか、そもそもジョンたちは讃美にどのような意図をこめて作り、歌わせたのか、そのようなテーマについてコンパクトながら行き届いた解説がなされています。

4章ではメソヂストの学者キンブローの提唱する「グローバル・ソング」を手がかりに現代的な課題について論じられています。ここで「グローバル・ソング」とは「多くの部分からなる一つの体がうたう歌」であり、地域教会に始まりさまざまな諸教派を経て、全世界の主の教会に至る大きな視野を与えてくれるものです。それは、また「世代間や異文化の断絶を越えて、互いの悩みや喜びを共有できる機会となる希望」を与えてくれるものでもあります。

本稿は「讃美やそのあり方が多様化する現代にある私たちもまた…次世代への讃美について、具体的な対話をいっそう進めていく時を迎えているのかも知れません」（84頁）ということばで結ばれています。「対話」は本論中に何度か出てくる大切なキーワードです。これを具体化することは、私たち一人一人に与えられた実際的な課題と言えるでしょう。

附論では「オルチンによる幻燈伝道」という、今まであまり論じられることのなかったテーマが扱われています。ジョージ・オルチン（1852-1935）は日本の讃美歌学の基礎を築いた人物ですが、日本全国を巡回し、幻灯で聖書の物語を投影しながら多くの人に福音を伝えた伝道者でもありました。当時、最新メディアである西洋の幻燈は大変評判で、娯楽を求める人々が数百人から千人規模で集まることもあったようです。オルチンは、そんな人々に向かって「キリストの真実に彼らの良心を開かせるため」に、トラクトを頒布し、説教を語り、讃美歌を紹介しました。まさに視覚と聴覚、ことばと音楽を総動員しての伝道とすることができます。

本書では、福音を伝えるために「人を惹きつける」ことに心を配ったという点で、「オルチンによる幻燈伝道」が「メソヂストの音楽」と並べて収録されています。これも現代の宣教論の一つのテーマと言えるでしょう。

❖ INFORMATION ❖

♪ 「教会福音讃美歌Vol.1 一礼拝を豊かに」 2013/10/23発行

『教会福音讃美歌』から、新しいレパートリーを中心に紹介するCDの第一弾。「礼拝を豊かに」というテーマで厳選された全17曲を、様々な演奏形態で収録。全曲に歌詞と解説付。



■演奏

西由起子、フェリス・フラウエンコーア(合唱)、
ピョン・ホギル、塩谷達也、塩谷美和、他

■定価2,625円(税込)

JEACS正会員(同盟、JECA、インマヌエル)の加盟教会と、賛助会員には会員特価があります。
お問い合わせ：正会員加盟教会は各団体事務所まで。賛助会員はJEACS事務所まで。

■収録曲

1. ほめたたえよ(8番)
2. 全地よ よみがえりの主を(249番)
3. 聖なる主の前に(250番)
4. さあ、主をほめたたえよ(201番)
5. とうとき主のみ救いよ(14番)
6. 父の神の真実(40番)
7. み栄え告げる歌は(244番)
8. 朝つゆの園を(378番)
9. わたしは聞いた(466番)
10. キリストの愛 我に迫れり(468番)
11. 初めにおられた神のみことば(46番)
12. 私の望みは主イエスだけにある(359番)
13. 終わりのときに(354番)
14. イエスよ、愛の御手をのべて(388番)
15. ギルアデの乳香(429番)
16. キリストにはかえられません(465番)
17. 主の祈り(379番)

♪ 讃美歌についての集会を企画してみませんか。

礼拝説教、伝道会、修養会、讃美についての学び、音楽奉仕者の研修や講習などに、福音讃美歌協会の理事、讃美歌委員を派遣いたします。ぜひお招きください。

- ・お問い合わせ info@jeacs.org
tel.03-5341-6920 fax.03-5341-6921 (いのちのことば社出版事業部内)

♪ 「福音讃美歌ジャーナル」投稿募集

福音讃美歌協会の働きへのご意見、ご希望、讃美についての思い、教会での取り組みの紹介など、皆様からの投稿をお寄せください。

- ・原稿は600字以内。
- ・電子メールにテキスト書類を添付し、住所、氏名、電話番号、所属教会を明記の上、福音讃美歌協会(info@jeacs.org)までお送りください。
- ・次号(2014年4月発行予定)掲載分の締切は、2014年2月末日です。
- ・掲載誌の発送をもって採否の発表に代えさせていただきます。

＊ 会 計 報 告 ＊

2013年4月-2013年9月

■収入の部■

科 目	2013年度予算案	2013年度中間報告
会員負担金	1,160,000	735,000
正会員	750,000	500,000
準会員	60,000	0
賛助会員	350,000	235,000
自由献金	300,000	60,200
その他	461,000*	22
当年度収入合計 (A)	1,921,000	795,222
前年度繰越金	887,530	887,530
収入合計 (B)	2,808,530	1,682,752

■支出の部■

科 目	2012年度予算案	2012年度実績
理事会費	140,000	33,947
委員会費	410,000	128,222
人件費	360,000	128,222
事務費	500,000	86,601
ジャーナル発行費	430,000	206,880
カンファレンス開催費	240,000	53,060
総会開催費	20,000	4,768
JEA関係費	50,000	35,000
予備費	80,000	0
当年度支出合計 (C)	2,230,000	728,478
当年度収支差額 (A) - (C)	- 309,000	66,744
繰越額／残高 (B) - (C)	578,530	954,274

* 『教会福音讃美歌』小型版の編纂印税見込み額

【賛助会費納入者】 (2013年4月～2013年9月)

菅生キリスト教会、世田谷中央教会、キリスト教朝顔教会、大宮キリスト教会、栗橋キリスト教会、都賀キリスト教会 (6 教会)

石川岩夫、稲垣博史・緋紗子、刑部照美、倉富隆子、斎藤眞木子、高橋和江、中山信児、福田崇・愛子、藤本侃也、横倉知恵 (12 件)

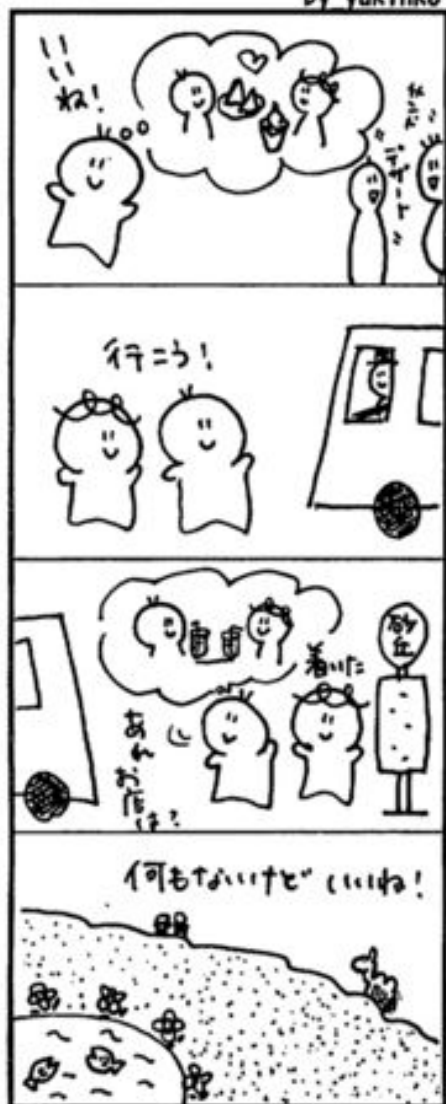
【献金者】 (2013年4月～2013年9月)

大磯キリスト教会、川越聖書教会、こどもの国キリスト教会、長津田キリスト教会、武蔵台キリスト福音教会、篠田安子、高橋和江、西川晴子 (8 件)

お名前の掲載を希望されない場合は、通信欄に匿名希望とお書きくださるか、メール (info@jeacs.org) で、その旨をお知らせください。

ハレルヤほうや

by yukinko



イザヤ35:1

福音讃美歌協会・会員募集

◇会員の種別は、以下の三種類です。

正会員（教会・教団・教派等）、準会員（超教派団体・グループ等）、賛助会員（趣旨に賛同し支援してくださる教会、個人等）

◇賛助会員のお申し込みは、入会申込書をご請求いただき、必要事項をご記入の上、郵送またはFAXでお送りください。承認後、年会費のお振込みにより入会が完了致します。

◇正会員、準会員のお申し込みにつきましては、協会へ直接お問い合わせください。

◆郵便振替口座◆

番号 00220-1-95127

名称 福音讃美歌協会

◆郵便貯金口座（ばるる）◆

番号 10500-82654721

名称 福音讃美歌協会

◆銀行口座◆

みずほ銀行 ユーカリが丘支店

普通預金 口座番号 1604668

名称 福音讃美歌協会

一般社団法人 福音讃美歌協会 JEACS

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-1
OCCビル 602号室

tel.03-5341-6920 fax.03-5341-6921
(いのちのことば社出版事業部内)

ホームページ <http://jeacs.org/> メール info@jeacs.org

From Editor 編集後記

『教会福音讃美歌』の発行から1年が経って、この夏、A6サイズの小型版が発行されました。当初、私たちは若い世代やミッションスクールなどで使っていたことを考えていましたが、年配の方からも小型版を待ち望む声が多く聞かれたのは嬉しい誤算でした。「中型版は重い」というのがその理由でしたが、その裏には、版が小さくなってもこの楽譜なら見えるという評価があったのでしよう。楽譜や文字が見やすいようにフォントや行間、字間、レイアウトにとことんこだわった版面作成者の苦勞はこのような形で報われたと思います。

この秋には「新しい讃美歌は音源を聴かなければ歌えない」というご要望にお応えして、CDも発売されました。今後『教会福音讃美歌』の中から新しい讃美歌を中心に約百曲を全5巻のシリーズでご紹介していく予定です。ご期待ください。他にヒムブレイヤーや、伴奏楽譜、解説などにも続けて取り組んでいます。

また、長期的な課題として讃美歌作家や編集者の養成があります。現在、御茶ノ水聖書学院の特別講座「讃美歌入門」では、教会での音楽奉仕者だけでなく、ゴスペルシンガー、邦楽演奏者、教職夫人、神学生など十二名が、日本語の讃美歌について学びながら、実際に作詞、訳詞に取り組もうとしています。また、今回のジャーナルには、テゼを訪れたことのある神学生からレポートを寄せていただきました。

主がさらに多くの方に讃美についての重荷と賜物と召しを与えてくださり、御名の栄光のため、主の教会のために豊かに用いてくださることを祈ります。（な）